

福祉社会実現のほじめの一步

茨城キリスト中

二年

秋山 あきやま

陽彩乃 ひなりの

福祉と聞いてイメージするのは、温かい雰囲気や人のためになにかをするというだけではなく、然としたものだ。辞書で福祉を調べると、人々の幸福で安定した生活を公的に達成しようとすることと説明されている。私たちの生活の中でも実は身近なものであることに気が付かされた。

自分自身の日常生活を福祉という視点で捉えろみると、意外と福祉との接点が多いことを発見した。一つ目は、小学校の時に、同じクラスにダウン症候群の子が在籍していたこと。二つ目は、父母が特別支援学校の教員として働いていること。三つ目は、私の将来の夢が保育になること。私の生活の中に、これほど福祉に関することがあつたことは驚きであると同時に、より豊かな生活を送るためには福祉が必要不可欠であることを再確認できた。昨年の夏は、コロナ禍でありながらも東京

オリンピック。パラリンピックの影響で熱気に満ちた熱い夏だった。数多い競技の中で私の目が引かれたのは、ボッチャ。私は小六の時に、親子レクでボッチャを体験した。ボッチャは、白のジャックと赤のジャック、青と赤のボールをチームで投げ合い、最後に白ボールに近いか方のチームが勝ちという仕組み。シンプルでも、頭脳戦といわれるほど様々な戦術を駆使して戦う競技で、障害者、健常者の垣根なく誰でも楽しめるスポーツである。クラスメートのダウン症のA子は、普段の生活の中で、周囲の友達から助けをもらったりすることが多くあった。しかし、ボッチャの時は、他の子が思い付かない作戦で攻めて勝利を手にしていった。その瞬間、A子の光り輝く個性を新たに発見したように感じた。チームをジャックする時のボールの配置に目を向けると、白ボールを中心に、青と赤のボールが集まって、障害者を社会の中心

に置いて、その周りを健全者が寄り添い、障害者を支える温かい社会の縮図のように見える。二の形こそがまさに充実した福祉を実現するための理想なのではないかと感じた。人間誰でも、得意、不得意なことはある。私自身も、数学は苦手だが漢字を覚えることは得意である。現在の世の中に目を向けてみると、ICTの発達により、苦手なことを情報機器を使って補える時代になってきた。一人一人の特性を輝く個性として捉えて、障害の有無に関わらず自分らしく生きていける世の中になると良いと思う。そのような社会を実現するために、中学生という立場で、私に今何が出来るのかを模索しながら、将来に向かっ

て歩んでいこうと考えている。